

加賀紋の系譜

花岡 慎一

-
- | | |
|-------------|---------------|
| 1. はじめに | 4. 加賀紋 |
| 2. 加賀藩初期の染業 | 5. 「作り紋」・「大紋」 |
| 3. 加賀染の始まり | 6. 加賀紋の種類 |
-

論文要旨

室町幕府の末期、永禄9年(1566)の銘がある白地花鳥肩裾模様辻ヶ花小袖(東京国立博物館蔵)に糸目糊を置いた友禪の技法が初めて出現してから120年目の、貞享3年(1687)に加賀染の名が、翌4年には加賀紋の名が初見されるのである。

丁度この時期出版された、種々の小袖の雛形には、友禪、加賀染を含めた数多くの染法名が、又、加賀紋を始めとする寄せ紋等が一挙に出現し、混沌とした時期を経て元禄13年(1700)以降には友禪と加賀染が残ったのである。

何故加賀染が存続出来たのか、最も大きな特徴は、初期の友禪に用いた顔料による彩色をそのまま続けた独特の色彩とぼかしやばかし合わせ、虫喰い等類のない細密な仕事有加賀ならではの味として世間に高い評価を得たからである。加賀染の名称が、加賀友禪と一般に呼称される様になった大正時代には、顔料から化学染料へ移行しながらあくまで、金箔、刺繍に頼らず、染色での表現に研鑽を重ね、昭和45年頃からは全国的な市場を獲得し産地として発展し今日に到ったのである。

この論考は、加賀染と同時に出現し、一時は花形であった加賀紋の流れを、加賀染と併せて考慮しつつその他のよせ紋、伊達紋との違いとその盛衰を、又、主として享保年間(1716~1726)の加賀藩史料並びに、紺屋棟取の御用命帳に出て来る大紋、作り紋の出現と消滅を時代を追って見ていく。

武士社会で最も密接にして且つ重要なシンボルであった紋どころが、加賀においては明治から庶民の生活の中に様々な形で花開いていった。打掛に刺繍で加賀紋をつけ、女性の紋は小さく見せるために変り輪をつけ、幼児の着物に手作りの押し絵紋を縫いつけ、加賀紋を染め抜いた夜着、花嫁のれん、加賀袱紗等等、加賀の地に発展した特色ある文化を述べてみた。